

論 文

遠隔形式による心理査定教育に関する一考察
－双方向性を重視した授業展開をとおして－

中園照美

(西九州大学子ども学部心理カウンセリング学科)

(令和3年2月9日受理)

**A Study of Psychological Assessment Education Offered Using a Remote Format
－ Implementing Classes that Emphasize Interactivity －**

Terumi NAKAZONO

(Department of Psychological Counseling Studies, Faculty of Children's, Nishikyushu University)

(Accepted February 9, 2021)

Abstract

In this paper, I describe training in psychological assessment using a remote method implemented for a "Psychological Assessment I" course. Handing out two types of materials, i.e., explanatory and fill-in-type, and presenting materials on preceding studies related to the class's content, promoted better understanding in the students. Regarding measures to guarantee reactivity, in classes that adopt an on-demand format by presenting materials and tasks, I showed the need to respond to the students' questions and explain the tasks in detail when providing feedback to such tasks. In class formats that use online conference tools, I showed that employing the Chat feature to answer the students' questions, whenever necessary, promoted their understanding. I also discussed handling psychological tests in remote-style classes, including keeping the test results closed to the general public, such as charts, figures, and related interpretations or hypotheses, and methods of presenting such data.

Key word : Psychological Assessment Education 心理査定教育
Remote Format 遠隔形式
Interactivity 双方向性

1. はじめに

平成27年9月に「公認心理師の資格を定めて、その業務の適正を図り、もって国民の心の健康の保持増進に寄与することを目的とする（厚生労働省、2015）」公認心理師法が公布された。それに伴い、公認心理師カリキュラムについても文部科学省・厚生労働省（2017）によって到達目標の項目や大学及び大学院における必要な科目が示され、心理アセスメント（心理査定）についての科目も学部教育・大学院教育ともに必修となっている。

このような状況から学部における心理査定教育の重要性はますます高まっているといえる。しかしながら、これまで心理査定教育に関する研究については、加藤（2019）による臨床心理士指定大学院の心理アセスメントおよび投映法教育のシラバス分析の研究や、大学院におけるロールシャッハ法の学び方や教育に関する研究（中園ら、2004や中園・重橋、2017など）、大学院のロールシャッハ法教育における「専門家による被検者体験」の意義に関する研究（森田・中原、2004）など大学院を対象にした研究が主であり、学部における心理査定教育を扱った研究は多いとは言えない現状がある。

そのような状況の中でも、福田（2015）は41大学66科目のシラバスの分析を通じ、学部段階における心理査定教育の現状について論考を行っている。福田（2015）は、公認心理師養成教育の役割が学部教育に新たに加わることから、学部卒業後に実務経験を現場で積むことを考慮すると、どの心理検査を学部教育で採用すべきかという点だけでなく、どのように教えるべきかという授業展開のあり方についても、教育実践をふまえながら検討を重ねていく必要があるとしている。

さらに、片本（2005）はバウムテストを題材として、花田（2015）は知能検査を題材として学部生を対象とした教育の工夫等について実践を通じた報告を行っている。片本（2005）や花田（2015）では臨床事例や検査用具そのものを用いることの倫理的問題や、臨床事例や検査用具を用いずに教育効果を高める工夫が示されている。

高橋（2014）は「臨床のこころ」を育成するプロセスについて、ロールシャッハ法に関する学部教育・大学院教育・卒後教育・スーパービジョンについて論考を行っており、その中で学部教育においては、受講生が必ずしも将来専門職に就くとは限らな

いため、学習をどこまで、何を目標として行うかは難しい問題としている。

また、ここまで心理査定教育の内容について述べてきたが、内容だけでなく授業形式についても検討を行う必要がある。令和2年度は新型コロナウイルス（coronavirus disease 2019：COVID-19）の蔓延に伴い、大学教育においても遠隔授業実施が余儀なくされた。心理査定の中でも心理検査については、著作権や倫理的な観点から厳重な扱いが求められ、一般社団法人日本心理臨床学会（2016）の倫理綱領「第3条2項」では「査定技法の開発、出版又は利用に際し、その用具や説明書等のみだりに頒布することを慎まなければならない。また、心理検査や査定に関する不適切な出版物や情報によって、査定技法やその結果が誤用・悪用されることがないように注意しなければならない。」ことが示されている。遠隔授業においては、倫理的観点からも心理査定に関する情報の扱いについて、対面授業とは異なる工夫が求められる。一般社団法人日本心理臨床学会（2020）は、新型コロナウイルス感染状況下における心理検査のオンライン研修や講義の際に、心理検査図版や解釈仮説が広く一般の目に触れることがないように、配慮を求める文書を掲載している。

しかしながら、遠隔形式での心理査定教育に関する教育方法については、これまでに論じられた研究は見当たらず、心理査定教育は心理検査等の扱いの問題からも主に対面式での授業を行ってきたことが推察される。教育内容を臨床心理学に広げた場合に、宮前・松下・藤本（2003）が教育職員免許取得法認定公開講座において、遠隔教育システムを用いた教育臨床に関する授業の意義について論考した研究があるが、この講座は4大学の会場を遠隔教育システムでつなげて行われており、今年度大学教育において行われた在宅環境での遠隔授業とは対象者や授業形式が異なっている。

以上のことから、学部生を対象とした心理査定教育について、特に遠隔授業形式での授業実践のあり方や工夫について検討することは意義があると考えられる。

そこで本研究では、筆者が担当した西九州大学心理カウンセリング学科3年次前期必修授業科目「心理的アセスメントⅠ」の授業実践について報告し、学部における心理査定教育のあり方や遠隔授業形式における工夫や留意点について検討することを目的とする。

2. 「心理的アセスメントⅠ」授業内容について

1) 授業目標

本講義では、心理査定（心理アセスメント）の目的や倫理について理解することを第一目的とし、さらに援助対象者を理解するための方法について理解を深めることを目標とした。心理検査については成り立ちや特徴、意義及び限界についても解説を行った。

学生の到達目標として、①心理査定の目的について説明できる、②心理査定に関する倫理的配慮について理解できる、③心理査定がどのように展開されるのか、着目すべき点は何かが理解できる、④様々な心理査定の方法について、成り立ちや特徴、意義や限界について説明できる、⑤テストバッテリーの組み合わせや結果の総合的理解について理解できる、⑥心理アセスメントにおける適切な記録及び報告、フィードバックについて理解できる、の6点を挙げた。

2) 各回授業テーマおよび形式

Table 1に「心理的アセスメントⅠ」の各回授業における授業形式・内容・資料および授業外課題について示す。

授業内容は公益社団法人日本心理学会・公認心理師養成大学教員連絡協議会（2018）に示された標準シラバスの内容に準拠している。また、後期に本講義を受講した西九州大学心理カウンセリング学科3年次の学生対象の「心理的アセスメントⅡ」の授業において、実習形式で複数の心理検査の被検者体験や解釈について学ぶ流れもあるため、本講義では心理検査の実習は行わずに各種心理検査については成り立ちや特徴、意義や限界についての内容を講義主体で行うこととした。

授業形式については、大学の教育システムの事情により、第1回から第5回までは教育ポータルサイトを通じて授業資料等の提示や課題掲出を行うオンデマンド方式で行った。第6回以降はオンライン会議ツールZoom（以下Zoom）を利用した同時双方向型方式で授業を展開した。オンライン会議ツールについては複数の選択肢があるものの、受講人数等の事情により令和2年度は本大学全体としてZoom利用が推奨されたため、本講義もそれに倣いZoomにて行った。

3) 授業内容の概要

第1回は心理的アセスメントの定義と目的について、第2回は心理臨床業務における倫理について、第3回は心理的アセスメントの観点および実際の展開について、第4回は面接法及び観察法について資料をもとに解説を行った。第5回から第14回はTable 1に示した心理検査について、成り立ちや特徴、意義や限界について解説した。第15回はテストバッテリー、適切な記録及び報告、フィードバックについて解説を行った。

3. 「心理的アセスメントⅠ」授業資料および授業外課題における理解促進の工夫

1) 授業資料

オンデマンド形式にて行われた5回目までは、要点をまとめて解説するためのMicrosoft PowerPointソフトで作成した資料（以下パワーポイント資料）と、重要点を空欄にして書き込みができる形式にしたMicrosoft Wordソフトで作成した資料（以下ワード資料）をそれぞれpdf形式にして受講生に配信した。なお、重要点については解説のパワーポイント資料の中で赤字にて示した。オンデマンド形式の授業の場合は、パワーポイント資料にさらに詳細な解説をコメント形式で付記した形式の資料とし、学生の理解の促進を促した。

Zoomを用いて同時双方向型形式で行われた6回目以降は重要点を空欄にして書き込みができる形式にした資料をpdf形式にして事前配信し、授業内では要点をまとめた解説のためのパワーポイント資料を画面共有機能で学生に提示しながら音声で解説した。

回によっては、関連する内容の先行研究文献の紹介を行うことで、解説資料の内容を発展させ理解を深めることができるように努めた。

配信した資料について、学生の感想として「解説資料の重要点が分かりやすい」「記入式資料に重要点を記載することで頭に入りやすい」「資料が分かりやすい」などが多く挙げられた。一方で、印刷機器の所有や受講時の機器状況によっては、授業中に複数資料の確認がしづらい状況があることも挙げられた。

2) 授業外課題

Table 1に示したように、各回終了後に理解度確

Table 1 各授業回における授業形式・内容・資料および授業外課題

形式	授業回	授業内容	授業資料	授業外課題
オンデマンド形式	第1回	心理的アセスメントの目的	シラバス・解説資料・記入式資料	①シラバスについて疑問点の記載 ②心理査定との定義と目的についてのまとめ
	第2回	心理的アセスメントにおける倫理	解説資料・記入式資料・架空事例資料 一般社団法人日本臨床心理士会倫理綱領	①記入式資料に記入した用語等の記載 ②倫理問題に関する架空事例についての検討
	第3回	心理的アセスメントの観点および実際の展開	解説資料・記入式資料 公認心理師過去問題(第1回9月間142・第2回問73)	①記入式資料に記入した用語等の記載 ②公認心理師過去問題(事例問題)への解答
	第4回	面接法及び観察法	解説資料・記入式資料 公認心理師過去問題(第1回12月間44・第1回12月間16および34・第2回問38)	①記入式資料に記入した用語等の記載 ②公認心理師過去問題(一般問題)への解答
	第5回	知能検査法①ビネー法	解説資料・記入式資料 架空事例資料 公認心理師過去問題(第2回問130)	①記入式資料に記入した用語等の記載 ②架空事例の精神年齢・知能指数の算出 ③公認心理師過去問題(一般問題)への解答
	第6回	知能検査法②ウェクスラー法	解説資料・記入式資料 公認心理師過去問題(第1回9月間76)	①記入式資料に記入した用語等の記載 ②公認心理師過去問題(事例問題)への解答
	第7回	発達検査法 遠城寺式、津守式、新版K式	解説資料・記入式資料 公認心理師過去問題(第1回12月間129・第2回問88)	①記入式資料に記入した用語等の記載 ②公認心理師過去問題(一般問題)への解答
	第8回	認知機能検査 HDMS-R、MMSE	解説資料・記入式資料 公認心理師過去問題(第1回9月間51および131・第1回12月間18)	①記入式資料に記入した用語等の記載 ②公認心理師過去問題(一般問題)への解答
	第9回	人格検査法①質問紙法 YG性格検査	解説資料・記入式資料	①記入式資料に記入した用語等の記載 ②質問紙法の概要・限界についてのまとめ ③YG性格検査の利点と限界についてのまとめ
	第10回	人格検査法②質問紙法 MMPI	解説資料・記入式資料 公認心理師過去問題(第1回9月間109・第1回12月間73および問90)	①記入式資料に記入した用語等の記載 ②公認心理師過去問題(一般・事例問題)への解答
	第11回	人格検査法③投射法 SCT	解説資料・記入式資料	①記入式資料に記入した用語等の記載 ②投射法の概要・利点と限界についてのまとめ ③SCTの利点についてのまとめ
	第12回	人格検査法④投射法 PFスタディ	解説資料・記入式資料 公認心理師過去問題(第1回9月間17)	①記入式資料に記入した用語等の記載 ②公認心理師過去問題(一般問題)への解答
	第13回	人格検査法⑤投射法 ロールシャッハ法	解説資料・記入式資料	①記入式資料に記入した用語等の記載 ②ロールシャッハ法の利点と限界についてのまとめ
	第14回	症状評価法(抑うつ・不安症状の評価)・診断面接基準	解説資料・記入式資料 公認心理師過去問題(第2回問69および問140)	①記入式資料に記入した用語等の記載 ②公認心理師過去問題(事例問題)への解答
	第15回	テストバッテリー、適切な記録及び報告、フィードバック	解説資料・記入式資料 公認心理師過去問題(第2回問125)	①記入式資料に記入した用語等の記載 ②公認心理師過去問題(事例問題)への解答 ③講義全体への感想や要望の記載

認のための授業外課題を提示した。全ての回において、授業内で解説した記入式資料に記入した用語等について、確認のために課題欄への記載を求めた。学生が提出した課題については解答についての解説コメントを返すことで正しい知識が定着するよう工夫した。特に、各回の内容に関連した公認心理師資格試験過去問題がある場合には過去問題を出题し、学生の解答後にはポータルサイトを通じて詳細な解答解説や関連資料の提示を行った。以下に各回の課題の概要を示す。

第1回は心理的アセスメントの定義と目的についてのまとめを求めた。第2回は心理臨床業務における倫理について架空事例をもとに検討させた。第3回は心理アセスメントの観点および実際の展開について、初期対応に関する公認心理師過去問題の事例問題を課題とした。第4回は観察・面接における態度、アセスメントにおける留意点、面接法に関する公認心理師過去問題の一般問題を提示した。第5回は知能検査（ビネー法）について架空事例の精神年齢・知能指数の算出と、ビネー法に関する公認心理師過去問題の一般問題を提示した。第6回は知能検査（ウェクスラー法）に関連した公認心理師過去問題の事例問題を課題とした。第7回は発達検査（新版K式）および幼児対象の発達検査に関する公認心理師過去問題の一般問題を課題とした。第8回は長谷川式簡易知能評価スケールおよび認知症に関する一般問題を提示した。第9回は質問紙法の概要・限界および矢田部・ギルフォード性格検査（YG性格検査）の利点と限界についてまとめる課題とした。第10回はミネソタ多面的人格目録（MMPI）に関する公認心理師過去問題の一般問題および事例問題を課題とした。第11回は投映法の概要および利点と限界、文章完成法（SCT）の利点をまとめることを課題とした。第12回は Picture Frustration Study（PFスタディ）に関する公認心理師過去問題の一般問題を課題とした。第13回はロールシャッハ法の利点と限界をまとめる課題とした。第14回は症状評価およびテストバッテリーに関する公認心理師過去問題の事例問題を課題とした。第15回はアセスメント実施の際の留意点に関する公認心理師過去問題の一般問題を課題とし、まとめとして授業全体の感想を求めた。

学生の授業外課題に関する感想として、特に公認心理師資格試験の過去問題の課題について、「数年後の資格試験受験に向けての心構えができた」「解

答の際に自分でも関連事項を調べることで授業内容がより深く理解できた」などの高評価を示す学生が多かった。事例的な問題を検討することについても、「現場で心理査定を行う際の査定者の心構えや援助対象者への配慮、心理検査を用いる際の留意点などに気付くことができた」という主旨の感想が多く見られた。

さらに、期末レポート課題として、「心理的アセスメント I で扱った（または扱う予定の）心理検査に関する論文のまとめ及び考察」と題し、授業で示した心理検査に関する心理学系の刊行論文1篇についてまとめ、論文を読んで考えたことを記述する3000字程度のレポート課題を提示した。期末レポート課題については、「心理検査を実践の場でどのように用い、活かしていくかが理解できた」「授業内容がさらに深められた」「心理査定に関する研究がどのように行われているかが分かった」などの感想を得た。

4. 「心理的アセスメント I」授業における双方向性の工夫

1) オンデマンド形式授業における双方向性の工夫

第1回から第5回までは大学の教務ポータルサイトに資料を提示し、その内容をもとに学生がレポート等の課題に取り組むオンデマンド形式で行った。

通常の対面授業で用いる資料では、資料提示時に口頭で補足を行い、さらに学生の理解度を確認しながら説明を補足していくことが可能であるが、オンデマンド方式では資料提示時には学生の反応を見ることができない。そのため、配信したパワーポイント形式の資料では、コメント機能を活用し、要点のまとめに加えて口頭で学生に向けて語り掛けるような内容のコメントを付記した資料を作成した。さらに、各回学生が提出する課題について一人一人に解説をフィードバックすることで、内容に関する誤解が生じている場合には早めに訂正を行うようにした。疑問点等が挙げられた場合には疑問を解消できるよう返答や解説を行った。

オンデマンド形式のみの評価ではないが、本授業全体の授業評価において「学生の質問に丁寧に答えてもらったので内容が身についた」という主旨の感想が見られた。オンデマンド形式授業時から一貫して課題への細かなフィードバックを行ったことが感想に反映されたことがうかがえる。

2) 同時双方向型形式授業内における双方向性の工夫

Zoomを用いた第6回以降の授業においては、Zoomの「反応」機能や「手を挙げる」機能、「チャット」機能を活用した。授業進捗の確認や共有画面による資料提示についての問題の有無等については「反応」や「手を挙げる」機能を利用した。さらに、教員が解説中に学生がリアルタイムに疑問点を書き込むことができる「チャット」機能を利用することで、学生は疑問点を授業時間内に解消し、疑問を持ち越さずに受講していることがうかがえた。疑問だけでなく、回によっては授業内で学生に意見や感想を「チャット」機能や「反応」機能を用いて求めることも行い、積極的な授業参加を促進した。

「チャット」機能については送信者が宛先を全員宛もしくは個人宛にすることを選択することができるため、対面授業時には周りを気にして疑問点を出しづらいという学生も、「チャット」機能を利用して教員個人宛に疑問点を尋ねやすいという利点があった。進捗についても、学生の反応を確認しながら進めたことで、「進捗がちょうどよかった」との感想が得られた。

その他、「遠隔授業形式自体に慣れることに時間がかかった」という感想や、通信環境を含めた自宅の機器状況により、「授業内容が一部聞き取れなかった」との報告も見られたものの、第6回以降同時双方向型授業においては、「対面と変わらずに受講できた」という感想が複数見られた。

3) 同時双方向型形式授業後の授業外課題の解説を通じた双方向性の工夫

オンデマンド形式の際に掲出していた課題レポートを、第6回以降のZoomを用いた同時双方向型形式の授業後にも継続して課題として掲出し、学生の理解度の把握を行った。オンデマンド形式の授業課題と同様に、各回学生が提出する課題について一人一人に解説のコメントを返すことで、内容に関する誤解が生じている場合には早めに訂正を行うようにした。疑問点等が挙げられた場合には疑問を解消できるよう返答や解説を行った。

5. 遠隔形式授業における心理検査の扱いについて

前述したように、一般社団法人日本心理臨床学会(2020)においては、新型コロナウイルス感染状況

下における心理検査のオンライン研修や講義の際、心理検査図版や解釈仮説が広く一般の目に触れることがないように、配慮を求める文書が掲載されている。本授業においても、第2回目の授業で臨床心理査定における倫理について解説し、心理査定が査定対象者の福祉のために用いられるべきであるという前提とともに、心理検査の内容をみだりに一般の人の目に触れさせないことの重要性を周知した。さらに学生への授業資料等の二次転載や授業内容の録画を禁止するとともに、第5回から第14回までの心理検査解説のための配布資料には各心理検査開発の歴史や各心理検査の目的・実施上の工夫・効用と限界などについて示したものの、心理検査の項目や図版等を提示しないよう工夫を行った。

Zoomを用いた第6回以降の授業においては、心理検査用具の一部や検査用紙の一部について、画面を通して検査概要を示したものの、提示については用具の大きさや検査用紙の形式に止め、データでの配信は行わないようにした。また、心理検査用具販売を行う会社のホームページサイトの画像等の画面共有なども行ったが、詳細な項目等や解釈方法などについては提示しないようにした。

特にロールシャッハ図版は、一般社団法人日本心理臨床学会(2020)においてオンラインへのアップ自体が禁止されていることや、図版を見ての学生の一人一人の反応が分かりづらいこともあり、実際の図版を提示せず沼(2009)の著書に示されている模擬図を示すにとどめた。

6. 「心理的アセスメントⅠ」に関する授業評価

前期授業終了後に実施された学生による授業評価においては本講義の受講生46名中31名が回答を行った。「心理的アセスメントⅠ」の評価は4点満点中項目全体平均が3.61であり、全ての項目において学科平均値を上回った。特に評価平均値が高い項目は、「14. 学生の質問等に誠実に対応しましたか。」「15. 公平に学生に対応しましたか。」「17. 教員は熱心に授業に取り組んでいましたか。」「18. この授業を総合評価して下さい。」の4項目であり、学生の評価平均値は各項目3.81であった。

7. 考 察

1) 授業内容に関する検討

授業テーマは公益社団法人日本心理学会・公認心理師養成大学教員連絡協議会（2018）に示された標準シラバスの内容に準拠していることから、大幅な変更の必要はないと考えられる。一方、授業で扱う内容の深さや心理検査の解釈まで体験的に学習するかについては、今後も検討の必要があると思われる。

高橋（2014）は学部における心理査定教育について、受講生が必ずしも将来専門職に就くとは限らないため、学習をどこまで、何を目標として行うかは難しい問題としている。本講義の受講生についても公認心理師資格や臨床心理士資格取得を目指して大学院進学を希望する学生だけでなく、福祉領域や一般企業における就職を希望している学生もいるため、心理検査の内容をどの程度深めて解説するかは、査定技法の扱いについて定めている一般社団法人日本心理臨床学会（2016）の倫理綱領を鑑みると慎重に扱う必要があると考えられる。本講義については、他科目で扱う内容や範囲も鑑み、心理検査の実習は行わずに各種心理検査の成り立ちや特徴、意義や限界についての内容を講義主体で行うこととしたが、福田（2015）が指摘したように、学部卒業後に公認心理師指定養成機関で実務経験を積む学生について考慮すると、授業展開については今後も検討や議論を重ねていく必要があると思われる。

2) 「心理的アセスメントⅠ」授業資料および授業外課題に関する検討

本講義では、授業内容を解説したパワーポイント資料と重要点を記入する形式にしてまとめたワード資料の2種類を学生に提示することで、学生が内容を理解しやすく、重要な点の確認が行いやすくなったことが感想から推察される。

オンデマンド形式で配信するパワーポイント資料は、学生の反応を見ての修正が即時に行えないことから、通常の対面授業時に口頭で補足するような内容も含めてより多くの情報を記載し配信する必要があると考えられる。

同時双方向形式の授業でも、事前に重要点を記入するワード形式の資料を受講生に配信し、授業内ではパワーポイント資料を画面共有機能を用いて提示し、口頭にて解説を行った。学生の感想からも、上記のような資料を提供することで、重要点が分かり

やすく、また学生自身が重要点を書き込むことで記憶に定着しやすくなることがうかがえる。樋山・橋浦（2020）は、情報関係の遠隔授業について「新型コロナウイルス感染症拡大に伴う遠隔講義受講に対する学生の視点からの成果と課題」と題して学生の感想のまとめと考察を行っており、その中で、できるだけわかりやすい資料を準備し、それをまず教員が説明した後に各自のペースで演習するなどの工夫を述べていることから、配信資料の工夫は授業の根幹をなすと考えられる。

授業外課題については、各回授業後の課題と期末レポートの提出を求めた。各回の授業後課題では、配信資料の重要点の記載を求めることで、授業受講時に誤った理解をしていないかの確認をすることが可能になったといえる。また公認心理師過去問題の解答、その他架空事例の検討などを課題として行うことで、現場で心理査定を行う上での着目点や留意点などについての学びとなったことが学生の感想から推察される。

ただし、先の樋山・橋浦（2020）は、調査対象となった学生が遠隔講義で課される課題の多さを、最も大きな課題と認識していることを示し、課題量の多さが学生の負担になっていることを推察している。授業後課題の分量や難易度については、他の科目とのバランスも見極めながら設定する必要があると考えられる。

3) 「心理的アセスメントⅠ」授業における双方向性に関する工夫の検討

オンデマンド形式の授業では資料提示時に学生の反応が見えないことから、学生の提出した課題への解答を細かく検討して理解度を把握し、一人一人に向けたコメントを丁寧に行うことが学生の理解促進や学習意欲増進のためにも求められると考えられる。

同時双方向形式の授業では、遠隔会議システムの機能を適切に用いることで、授業進度や画面共有した資料状況の確認、授業内での疑問点の把握と回答を行い、学生の理解を促進する必要性が示唆される。

樋山・橋浦（2020）は、遠隔講義では臨場感や仲間とともに学んでいる感覚の欠如、孤独感という問題が生じやすいことを指摘している。「反応」機能や全体向けの「チャット」機能、さらに本授業では行わなかったものの、「グループワーク」機能の利用などを取り入れることで仲間とともに学ぶ感覚の醸成につながると考えられる。また、授業内だけで

なく授業後課題へのフィードバックを並行して行うことは、教員が自分の取組みを認め評価してくれるという感覚に繋がり、孤独感の低減にも役立つと考えられる。

4) 遠隔形式の授業における心理検査の扱いについての検討

まず、心理検査を学部教育においてどのように扱うかの問題については、花田(2015)でも述べられているように、心理査定教育に携わる者が継続的に考え続けねばならない重要な課題である。将来心理専門職に就くとは限らない受講生に対し、検査の内容や解釈方法全てをつまびらかにすることは一般社団法人日本心理臨床学会(2016)の倫理綱領からも慎むことが求められるため、学部教育における検査用具や検査用紙の提示、解釈方法の解説は慎重に行う必要がある。一方で、福田(2015)が指摘したように、学部卒業後に公認心理師指定養成機関で実務経験を積む学生について考慮すると、学部教育において複数の心理検査の解釈まで行うような講義・実習も必要であると考えられる。このような問題に対処するための案としては、心理査定に関する授業の受講を心理専門職志望者に限るという受講制限なども考えられるが、本講義は学科必修科目であり、受講制限を行うことはできなかった。よって、本講義のように、心理検査の解釈実習は行わずに各心理検査の成り立ちや特徴、意義や限界についての内容を講義主体で行い、検査用具等の提示も一部にとどめるという心理検査の扱いは、心理専門職を志望しない受講生も対象に含む場合の心理査定教育の一つの方法として有効であると考えられる。

さらに、遠隔形式の心理査定教育において心理検査の情報を配信資料等にどの範囲まで示すかということも、今後遠隔形式の授業が継続する限りは検討すべき課題であると思われる。一般社団法人日本心理臨床学会(2020)が心理検査図版や解釈仮説が広く一般の目に触れることがないように、オンライン教育や研修時の配慮を求めているように、配信資料の記載内容には十分留意する必要がある。本講義では配信資料自体に細かな検査項目や解釈の仕方、図版や用具用紙の画像は載せないことを意識して資料作成を行った。また、同時双方向形式の授業においても、詳細な項目や解釈方法の提示は行わず、画面で示す検査用具等は必要な場合に限り一部にとどめることに留意した。特に、新規刺激への反応の仕方が

解釈上重要なロールシャッハ図版は図版自体を提示せずに模擬図の提示とした。このような提示の仕方を行うにあたって、授業の初期段階で心理査定や心理検査用具の扱いに関する倫理教育を行うことが欠かせないと考えられる。倫理綱領が作成された背景には、援助対象者の福祉に資するという大前提があり、心理査定に関する情報が広く一般の目に触れることは、援助対象者に対する正しい理解の妨げになるおそれがあることを受講生に十分理解させることがまず求められる。倫理について十分に学生が理解することで、授業で行う心理検査の提示範囲への納得が得られるとともに、資料の二次転載をしないことを含め、心理査定に関わる情報を公にしないことなど学生が自らの行動に責任を持つことにもつながると考えられる。

8. 終わりに

本稿では、「心理的アセスメントⅠ」の授業において実践した遠隔形式による心理査定教育について検討を行った。

学生への配付資料については、解説資料と記入式資料の2種の資料の提示や、授業内容に関連した先行研究の資料提示が学生の理解を促すことを示した。

双方向性を担保するための取組みについて、資料および課題提示によるオンデマンド形式の授業形態では、課題へのフィードバック時に、学生の疑問への応答や課題の解説を詳細に行うことの必要性を示した。オンライン会議ツールを利用した授業形態では、チャット機能等を用いて学生の疑問点に対する回答を随時行うことに加え、授業外課題を通じて学生の理解度の把握や疑問への回答を行うことで、学生の理解をさらに深めることができることを示した。

さらに、遠隔形式の授業における心理検査の取り扱いについて、心理検査図版や解釈仮説について一般公開しないための資料の工夫や、提示の仕方の工夫について論考を行った。

冒頭部分にも示したように、令和2年度は新型コロナウイルス感染状況により、急遽遠隔形式にて心理査定教育を行う状況となった。本稿では筆者の授業実践をもとに検討を行ったが、今後も新型コロナウイルス感染状況によっては遠隔形式での心理査定教育を継続して行う必要があると考えられるため、さまざまな大学の学部で行われた遠隔形式による心理査定教育の状況を検討することで、より充実した

心理査定教育プログラムを構築していくことが可能になると思われる。

付記

「心理的アセスメントⅠ」の講義において積極的な学びの姿勢を見せてくださった全ての受講生に心より感謝申し上げます。また本稿を作成するにあたり、感想の利用に同意いただいた受講生の方々にも感謝申し上げます。

文 献

- 福田 雄一 (2015). 学部段階における心理査定の教育の現状：心理検査の採用状況を中心に 広島文教女子大学心理臨床研究, 6, 28-33.
- 花田 利郎 (2015). コース立方体組み合わせテストを活用した知能検査の教育方法の検討 西南学院大学人間科学論集, 10(2), 95-113.
- 樋山 淳雄・橋浦 弘明 (2020). 新型コロナウイルス感染症拡大に伴う遠隔講義受講に対する学生の視点からの成果と課題 東京学芸大学紀要自然科学系, 72, 125-130.
- 一般社団法人日本心理臨床学会 (2020). 倫理委員会からのお願い (注意喚起) 一般社団法人日本心理臨床学会 <https://www.ajcp.info/wp-content/uploads/2020/07/20200722.pdf> (2020年12月4日)
- 一般社団法人日本心理臨床学会 (2016). 倫理綱領 一般社団法人日本心理臨床学会 https://www.ajcp.info/pdf/rules/0501_rules.pdf (2020年12月4日)
- 片本 恵利 (2005). 樹木画の対提示による心理アセスメントに関する実習の試み—臨床心理基礎実習におけるバウムテストの解釈に関する実習— 沖縄国際大学人間福祉研究, 3(1), 37-53.
- 加藤 佑昌 (2019). 臨床心理士指定大学院の心理アセスメントおよび投映法教育のシラバス分析 専修人間科学論集 心理学編, 9(1), 25-34.
- 公益社団法人日本心理学会・公認心理師養成大学教員連絡協議会(2018). 公認心理師大学カリキュラム標準シラバス (2018年8月22日版) 公益社団法人日本心理学会 https://psych.or.jp/wp-content/uploads/2018/04/standard_syllabus_2018-8-22.pdf (2020年12月7日)
- 厚生労働省 (2015). 公認心理師法 厚生労働省 https://www.mhlw.go.jp/web/t_doc?dataId=80ab4905&dataType=0&pageNo=1 (2020年12月7日)
- 宮前 義和・松下 文夫・藤本 光孝 (2003). 遠隔教育システムを用いた教育臨床に関する授業 「教育臨床心理学特論」の意義について 香川大学教育実践総合研究, 7, 103-112.
- 文部科学省・厚生労働省 (2017). 公認心理師のカリキュラム等について 文部科学省・厚生労働省 <https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-12200000-Shakaiengokyokushougaihokenfukushibu/0000174192.pdf> (2020年12月7日)
- 森田 美弥子・中原 睦美 (2004). ロールシャッハ法教育における「専門家による被検者体験」導入の意義 ロールシャッハ法研究, 8, 61-70.
- 中園 照美・重橋 のぞみ (2017). 大学院修士課程におけるロールシャッハ法教育 —臨床心理学専攻修士課程一年次前期「投影法特論」および後期「臨床心理査定演習Ⅱ」における授業実践— 福岡女学院大学教育フォーラム, 19, 25-34.
- 中園 照美・長崎 千夏・吉岡 和子・高橋 靖恵・古賀 英子・富田 真弓・本嶋 可奈子(2004). ロールシャッハ法の学び方に関する研究 (Ⅱ) 九州大学心理臨床研究, 23, 111-119.
- 沼 初枝 (2009). 臨床心理アセスメントの基礎 ナカニシヤ出版
- 高橋 靖恵 (2014). 心理アセスメントの実践的訓練を通して理解する「臨床のこころ」 高橋 靖恵 (編) 「臨床のこころ」を学ぶ心理アセスメントの実際 (pp. 198-221) 金子書房